

「ルパン」と私

白井浩司

(慶應義塾大学名誉教授)

あの戦争が終ったとき私は、日本放送協会(現在のNHK)の海外放送の職員だった。敗戦前夜に、のちに学習院大学教授となった丸山熊雄さんと終戦の詔勅の仏語訳に取組んで内幸町の局内で半徹夜をした。当日、正午近くに一人の陸軍将校が正面玄関から血相を変えてつかつかと入って来ると、スタジオへの通路は取らずにエレベーターに乗って上って行ったが、玉音放送阻止が不可能とわかったのか、すぐすぐと引返したのを目撃した。狂気の時代の終焉を象徴する出来事だった。

九月になると占領軍の指令で海外放送は禁止され、私は国内放送の演芸課に転属となった。先輩局員に連れられて、咄家、浪曲師な

どに会いに行ったが、歌舞伎の先代菊五郎を訪ねた帰り、その局員が、あんな偉い人に会えるまでどんなに苦勞したか、簡単に君が会えたことをありがたく思わなければ、と先輩風を吹かせた。私は、自分が好き好んでこの部署に移ったのではない、いかに六代目が偉大であっても、特に会ってみたいと思ったことはなかったし、向うが会ってくれたのはこちらがNHKだからだろう、個人なら洩もひっかけない、といった文句が喉からでかかったが、それを抑えてもうここを辞めようと思った。

十月に入ると局の二階の海外放送用だった大部屋は外国通信社によって占拠された。まったく偶然に踊り場で旧知のロベール・ギラン氏に遭ったところ、AFP(フランス通信社)で人を探している、よかったら来ないか、と言うので一も二もなく承諾した。アヴァス通信社の後身であるAFPの日本支局と言っても、卓子が四卓

あるだけで、APやロイターなどとの雑居だった。そのうち急にギラン氏が理由も言わずに帰国し、後任にレオン・ブルーという人になった。その人の政治家とのインタヴューに通訳として同行したが、西尾末廣氏や志賀義雄氏が外国語は苦手であるのに反して、芦田均、檜橋渡両氏は見事な仏語を操り、通訳なんか必要ではなかった。

昭和二十一年六月か七月に、不意に山田吉彦さん(のちに、きだ・みのるの筆名で小説を書く)が飄々たる姿を見せた。山田さんとは初対面だったが、『モロッコ紀行』、『レヴィイ・ブリュール』、『未開社会の思惟』、『ジュリアン・パンダ』、『知識人の反逆』などの著訳書を持っていたのですぐに親しくなった。山田さんは遊軍記者のような仕事をしていた、夕方になるころ顔を見せたり、見せなかったりだった。ブルー氏とは年来の友人のようだった。銀座で再開した酒

場「ルパン」に初めて私を連れて行ってくれたのがこの山田さんである。地下一階に降りて行く階段がとても急なこと、模写にちがいないが、イタリヤ・ルネサンス期の領主らしい男の横顔を描いた肖像画が飾ってあったことなどが印象に残った。

暁星と慶應の先輩にあたる作家の丸岡明さんも昔からの常連で、よく御一緒したが、丸岡さんが急な階段を踏み外して腰を強く撲つという樗事(ちくじ)が起きた。その前にも某氏が頭から滑落する事故があったので、「^{よから}こから注意をなさるように」という達筆の貼紙がしてあったが、こころ無い客に掛け額ごと持ち去られた。

戦前から住んでいた借家の持主が戦後成金に家作を売り渡したため、新しい家主が私を追いだそうと、一階に満洲からの引揚者一家を住まわせた。昭和二十八年末に漸く自分の家を持つまでは、間借りをしたり、知人の別荘を借りた

りして居所定まらず、諸処を転々とした。その間、結婚をし、また、昭和二十二年四月から慶應で教鞭を執ることになったので、^{ルパン}「は恰も友人や出版社の人たちと会う応接間のような役割を演じた。文藝春秋の鷲尾洋三さん、岡富久子さん、例の有名な太宰治の写真を撮った林忠彦氏その他、そこで知り合った人々は数多い。慶應の教師となつてからは教え子を通してよく飲みに行ったものだが、三田ではあまりお眼に掛らない中国文学の奥野信太郎先生が、飛び切り美人の女子学生数名を連れて来ておられるのに出会したこともある。

盛大に挙行されたが、直後にママ（高崎雪子さん）が病いに倒れ、二度と復帰することがなかった。いっぺんに文壇と疲れとが噴きでたのではないだろうか。その後、ママの弟の武君が店を切回しているが、常連客は高齢になり、鬼籍に入る者も続出したのだから、経営方針が變つたとしても仕方がない。私は、早い時間に行つて武君と懐旧談に耽るのを楽しみにしているが、そのとき自分が紛れもなく老人になり、いよいよ「長寿恥多し」の年齢に達したことを思い知るのである。

「ナスカの地上絵」を襲う危機

楠田枝里子

（司会者、エッセイスト）

十年あまり前、砂漠の果ての小さな町で過ごした、あのおだやかで幸福な時間は、二度と甦ることはないのだろうか。

ホテル・ツーリストスタの中庭で、人々はひとりの高齢の婦人の話に耳を傾けていた。日は暮れ、ハチドリもハミングをやめて塙に帰っている。月明かりに浮かび上がったブルーの水面が、時折思いだしたように風に揺れる。白髪の婦人は、背筋をシャンと伸ばし、英、独、仏、スペイン語を巧みに操つて、「ナスカの地上絵」についての講義を続けていた。

かな時を超えて、古代へとさかのぼり、さらに宇宙の営みへと結ばれていたような気がした。

講義をしていたのは、マリア・ライヘというドイツ人女性。ナスカの地上絵は天文学的な意味を持っていたとする、地上絵研究の第一人者である。彼女は一九〇三年ドレスデンに生まれ、二十代の後半に単身ペルーに渡り、「ナスカの地上絵」と巡り合つて、これこそが人生を捧げる道だと確信を持ち、五十年以上も砂漠のなかで研究を続けてきたのだった。二十年ほど前から妹のレナーテもドイツからペルーに移り、ともに私財を擲つて遺跡の保護に務めてきた。ペルーの国自体が貧しく、政府に彼女らの活動を援助するだけの経済的余裕はなかった。マリアの著書の売上げも、ドイツ政府から支給される姉妹の年金も全て、地上絵のために注ぎこまれた。

世界各地からナスカを訪れる人々に、望まれればマリアはいつ